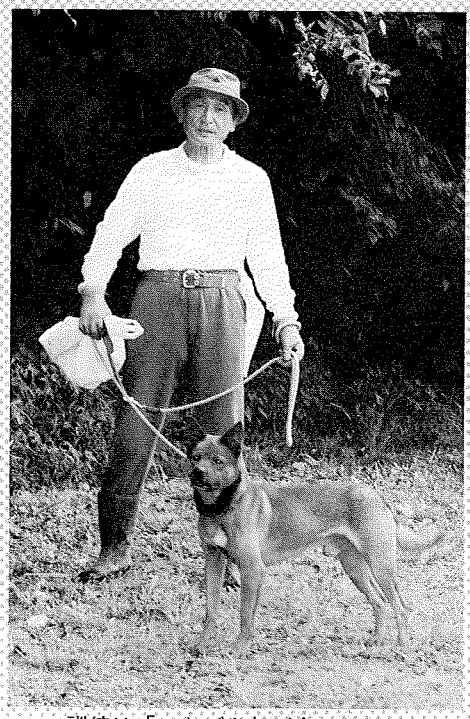
連載

新 ああ、猪猟 泣き笑い

新たな狩猟人生の旅立ちに

② ローマは1日にして成らず(1)

川崎市 田宮 治



訓練は「つなびき」が全てである

◎名犬への道(猪止め犬)

気の遠くなるような大変な目標であるが、大河の源となる一滴を探し当てる心境で、まずは優れた「基礎犬」(素材犬)を手に入れることである。当然、猪猟の達人が使役している止め犬の中からの選択になる。達人にきちんと礼を尽くし、自らの目で確認したうえで、その子犬を信じて大切に育てることだ。

これから述べることは、過去に述べてきたことと重複するかも知れないが、大切なことなのでご容赦願いたい。また、異なった意見が多々あるのも当然と考えている。しかし本稿は、私の猪犬作りの根底に流れる不変の信念と、失敗と挫折をバネにしてやっと辿り着いた考えと方法であることをご理解いただきたい。

私は、遺伝学や血統書や書物に頼らず(決してそれらを無視するものではない)、時間をかけて実戦(実践)の中で学んだ知恵を駆使し、猪犬のあるべき姿を見続けてきた。その中で、私が行う猪猟に欲しい猟芸は取り入れ、悪いと思われるものは除いてきた。目指したのは、**自分に合った猪犬**、一人で(単独で)イノシシが獲れる犬作りである。

猟の世界に身を投じ、猪犬とかかわって50年余。そこで学び得た体験と勘を頼りに、やっと出来上がった猪犬達がいる。彼らの猟能・猟芸を生かすための訓練と、さらに一芸に優れた猪犬作りについて述べてみたい。

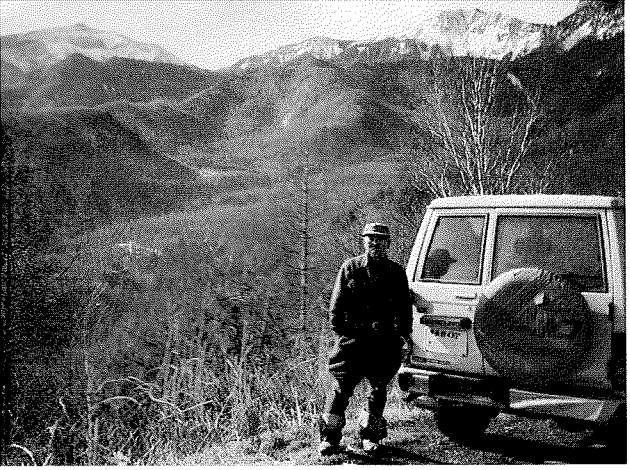
猪犬作りには、「これがベスト」などという定義はない。今の私にあるのは、日々の努力・精進によってのみ完成する…という確固たる信念である。私自身、究極の目標を「**最高の猪犬作り**」に置き、いつの日か、後世に名を残すような猪犬を作り上げたいと思っている。その日を夢見て、日々新たに励んでいるのであるが…。

既存犬で、品評会に出してみたくなるような犬だからと言って、その犬が「猪犬」として立派に猟をこなすかと言えば、必ずしもそうとは限らない。外見にのみとらわれ、その犬の持つ猟能の有無を見抜けなければ、未来永劫、最高の猪犬などできるはずがない。

猪犬作りにおいて、例えば「目先のことにとらわれ、安易にF1を作るべきではない」「既存犬を守るべきだ「良い犬×良い犬=良い

犬ができるならば、世の中名犬だらけになってしまう」等々、一見理に適うと思われる意見もあるが、それほど難しいのが猪犬の世界…ということになる。

繰り返す。人それぞれ、考え方や価値観は違って当然。だが、「自分に合った最高の猪犬」を目指すならば、目標を1本に絞り、その目標達成のための手段・手法を考えることだ。事実、私もそのようにしてきた。今、私が断言できるのは、「特に難しいと言われる単独猪猟の名犬を望むのであれば、**あらゆる固定概念を捨て、信念と覚悟を持って自らが望む犬作りに邁進すべきだ**」ということである。


山嵜七郎氏(長野県南佐久地区会長)と猟場

単独猪猟における立役者は、あくまでも一流芸の猪犬であり、その中でも名犬とは、主人が望む猟法に合った芸をこなし、例え荒猪でもきっちり止めきり、撃ち獲らせてくれる犬のことである。加えて、いかなる猟場においても、安全かつ安心して猟ができる犬でなければならない。ゆっくりと狩り進む中で、愛犬の猟芸を眺めるだけでも楽しくなる、そんな頼りになる犬こそ名犬であろう。

◎猪犬は自分で作るもの

「猪猟を極め、猪犬を極める」という目標を定め、一歩一歩登り詰めて行く過程で、当然のことながら、猟人の考え方も猪犬の猟芸も良いほうへと変わっていく。「進歩」と言ってよいだろう。変わる、進歩する…これが大事である。猟においても犬を見ることにおいても、「研ぎ澄まされた感覚」が出せるようになってもらいたい。

大物猟を始めた頃の猟人は、どうしても「五目猟」(鳥猟やウサギ猟など)のイメージで猟犬を使ってしまう。そのうちに、追う獲物が猪鹿になり、猟犬もそれに合うものを使うようになる。そして極めれば、必ずや「イノシシ一本の真剣勝負」の単独猟となる。

イノシシ一本…となれば、当然犬も「**イノシシだけに行く犬**」でなければならない。やっとの思いで大山を登り、イノシシの寝屋を定め、「それ行け!」「よし、出たぞ」…??「あれ、ウサギか~」では興醒めもよいところだ。

何事でもそうであるが、進歩・進化していく過程で、使う道具(猪犬)の質や好みも自分に合うように少しずつ変わっていくものである。頂点を極めようとするなら、道具もまた自分に合った最高のもの、こだわりのもの…特注品が求められ、自己の技術と相まって最高の技が引き出されるのである。狩猟道も全く同じで、銃であれ、他の猟具であれ、そして猟犬も選りすぐりの逸品が不可欠となる。

大物猟を始める人が「必ず」と言ってよいほど求めるのが、前述の「何でも追いかけ、獲らせてくれる五目猟の猟犬」である。「まぁ、このくらいの猟ができればいいだろう」程度なら既存犬で十分だし、それが一番手っ取り早いとも思う。しかし、私がこだわっているのは、「**イノシシだけに行く一流芸の猪犬**」である。

五目猟もまた単独猪猟への通過点であり、そこで多くを学び、やがて「一流芸の犬が欲しい」となっていくと思う。それが「特注犬」である。単独猪猟を極めようとすれば、どうしても猪猟専門の犬が必要になる。

ご存じのように、大物猟を代表する犬種の中で、血統書もあり、立派に完成されたのが紀州犬である。その紀州犬を使って立派な猟をされている猟人も多い。甲斐犬にしても同じである。ただ、血統書があって「これは良い犬だ」「この血は守るべきだ」と力説された犬であっても、実戦で使ってみて、その猟芸に「これでは満足できない」と感じる猟人も多いと思う。

名犬のツル。富士子号(左:6カ月)と父親「富士雄号」(母は「ラン号」)

私も含め、そのような猟人が求め育てた猪犬が今猟界で競い合い、活躍している。例え、それらの猪犬に血統書がなかろうと、「雑犬」呼ばわりされようと、現実に大きな実績を残しているのであるから、大いに胸を張りたい。

「F1を作るべきではない」と言う声をよく聞く。しかし、紀州犬に例えるなら、この犬ができた地元では、展覧会用のものを「紀州犬」と呼び、猪猟に使う犬は「猪犬」と呼んで、きちんと区別してきたと聞いた。

また、「血統書」などに固執しない猪猟の達人は、独自の研究・改良によって猪犬の本道を追い求め、立派にその系統を確立している。細田系、小竹系、本誌筆者である古家弥知夫氏の古家系などがそれに当たる。

とにかく鼻の良い血統である

いかなる事柄も、既成事実を学び、それを守っていくのであれば、それは学習による実践であり、文献や教本を調べて行えばよいことである。しかし、「改良・新生」とは、研究であり試行であり、考案であり発明である。

「完成された最高の猟犬」と思っていても、使っているうちに不満が出ることもある。例えば犬同士の「ケンカ」、人畜への「咬みつき」などの危険性があった場合などである。これらは最近、私の周りでもよく起きていることだが、このような猟犬では、安心して猟ができなくなる。

愛玩犬(ペット犬)でも、全く同じである。ひと昔前までは、愛玩犬も番犬が主流であった。どの家でも申し合わせたように、同じ犬種が飼われていた。しかし、それらの大半は家庭から消えていった。どのような立派な血統書付きの犬であっても、作出者が懸命にその血を守ろうとしても、「うるさい」犬や「危険性がある」犬は消えていく運命にある。反対に、必要とされる犬、望まれる犬は残り、また新たに出現してくるのである。

猟犬界においても、既存犬を守ることや使いこなすことは良いことであり、大切なことであると思う。しかし、猟界もまさに日進月歩。現状維持では、それこそ「守る」どころか「後退」にもなりかねない。絶えず前進をテーマにしたいと思う。

目標は「最高の猪犬作り」である。それゆえ、単独狩猟で必要とされる全ての猟芸をこなす犬を作り上げるためにも、積極的にトライすることである。言うまでもなく、心ある猟人ならば、「悪い犬×悪い犬」の交配などするはずもなく、必ず自分に合った素晴らしい猟芸を見せてくれる猪犬を作る努力を重ねているはずだ。

◎血統書付きとF1の違い

そもそも私は、猟犬においては、天然記念物であるとか、純粋の日本犬である…とかにこだわる必要はないと思っている。「F1」という表現も、日本犬とブルーチックなどの追跡犬との交配でできた犬を言うならいざ知らず、和犬の中でも猪猟に秀でた「良い犬」×「良い犬」との交配でできた犬に使う必要はないと思う。

山梨県への遠征にて、[illegible]雨宮氏、渡辺氏、[illegible]氏、[illegible]さん、[illegible]氏。皆さん、山梨県[illegible]人級の方々である

私の場合、猪犬を手がけて八代ほどになるが、今は体形も猟芸も完全に固定していると思っている。遡って、三腹(3年)ほどは全く同じ親同士で子犬を取っているが、猟芸の悪い犬は1頭も出ていない。「自分に合った、イノシシだけに行く強い犬。安全で安心して猟のできる犬を」の第一目標も、色々な方々に認めていただけるようになったと自負している。

これもひとえに、優れた基礎犬(素材犬)を分けてくださった全国

の先達のお蔭であると、感謝している次第である。そうした方々への恩返しのつもりで、ここ5～6年は、少しでも初心者の力になればと、方々へ出かけている。そこで猪猟だけでなく、犬の訓練についても、持てる知識と体験を話している。また、本誌のお蔭で全国の達人ともお会いでき、心より嬉しく思っている。

時に、子犬の縁で色々な猟場に招かれて行くが、愛犬達はそこでもきっちり仕事をしてくれている。寝屋鳴き(寄せ鳴き)→追い鳴き→止め鳴き…までを見事にこなしてくれるので、招いてくれた方も感心され、私も満足している。猪猟を極めた猟人の犬を観る目は確かで、私の犬の止め芸が一級品だと認めていただいた。誰しも他人に認められることは嬉しいし、自分が行ってきたことへの自信にもつながる。

小さい獲物だが，犬だけで獲れたのが嬉しい

しかし、私がいくら良い犬を作ったと思っても、人様から見れば「それはF1だろう」ということになる。私は、自ら望んでF1を作っているわけでもないし、作出した犬を「雑種犬」と思ったこともない。「犬種を超えた最高の猪犬を…」との思いで取り組んでいる。

ここで、純粋の日本犬と雑種犬(F1)について、一歩踏み込んで考えてみたい。「純粋」と言うからには、それを証明する「血統書」が必要となるが、この血統書が問題である。私の持ち犬でも、紀州犬やブルーチックには血統書が付いているが、そこに記載されているのは、せいぜい六代である。

新たな犬の持ち主(飼い主)が、六代の全ての犬を知っていることはなく、猟能・猟芸についての記載もない。なお、ポインターなどを例にとってもわかるが、書類さえ整えば、血統書を取るのは容易である。そこに記載されるのは犬の名前だけであり、猟犬でありながら猟能・猟芸を示す記載はなく、「○○チャンピオン」などと抽象的な記載があるだけである。

ある一定の年月(多年ではない)を費やし、的確な交配をし、きちんと書面にさえすれば、血統書を作ることは容易である。また、「純粋」とか「天然記念物」と声高に言っても、それらの規定が定まって100年にも満たないのであるから、論議にどれほどの意義があろうか。

誰もが認める猪犬として屋久島犬と日向犬があるが、これらは甲斐犬などと同じ流れで今日に至っていると思われるが、きちんと血を守って系統立て、保存・繁殖を行った猟人がいなかったのか、「必要なし」の判断であったかどうかわからないが、血統書がない。

今、犬界を見渡すと、「純粋犬」とも言えそうな雑種犬が実に多く見られる。そこで、和犬であろうと洋犬であろうと、「これぞ純粋犬」と言い切れる犬種が存在するであろうか？　という問題に突き当たる。私の持論は、厳密に言えば、世の中の全ての犬が雑種犬である…となる。

動物病院に掲げてある「犬の系統図を思い出していただきたい。それを見れば一目瞭然である。全ての犬が同じ先祖犬から始まり、長い長い年月をかけて多方向へ分かれ、現在の犬種になっている。それゆえ、「純粋」とか「雑種」と言っても、そのことが猟犬において重大事項になるのはナンセンスだと思うのだが…。

以上のように、私は血統書や純粋犬にこだわってはおらず、同じように猪猟の達人が望む現実も、「猪猟で使える一流芸の猪犬」であると確信している。

群馬県の猟友・小板橋氏と筆者の1軍犬

◎それでも地球は回っている

どんなに迫害を受けようと、決して自説(地動説)を曲げなかった

前を行くのが猟友・篠原氏

クマも出る群馬県の猟場

ガリレオの最後の言葉である（とされている）。現在では当たり前のことであっても、世の中が驚くような新説を唱えれば、反論や誹謗、迫害は当然であったろう。

現代に置き換えても同じである。研究や発明によって新製品や改良品を生み出そうとすれば、そこには幾多の失敗があり、反論・妨害も生じてこよう。しかし、目指す方向や、作り出すものが真実正しければ、その過程においていかに奇異の目で見られようと、いずれ証明、実証される日がくることは歴史が教えてくれている。

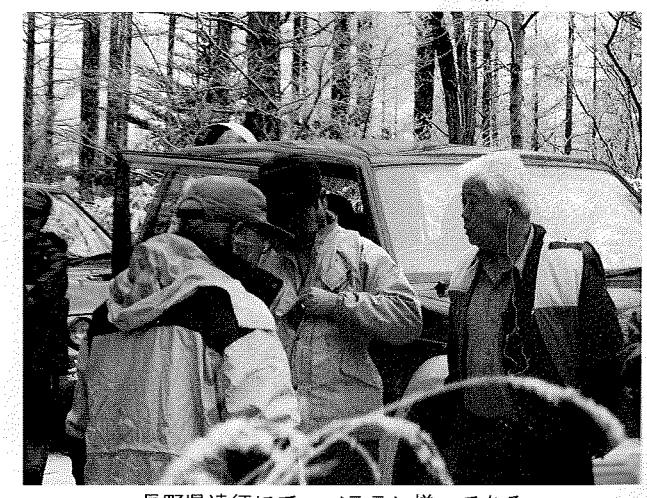
私は、猪犬作りにおいて、確固たる信念を持って取り組んでいるつもりである。猟人が精魂込めて作り上げる猪犬の基本は、やはり「**良い犬×良い犬＝良い犬**」となる。間違っても、キュウリの蔓にナスがなることはなく、「トンビがタカを生む」交配もないと思っている。

猪犬を作るから…と言って、素人がにわかに遺伝学をかじったところで、どうにかなるものではない。できること、やるべきことは、そして最も大切なことは、**猟人の立場で見て考え、実行する**ことである。猟人にとっての「誰にも負けない何か」とは、猟人の目で見た確かな猟犬感と、猟場における多くの体験である。

「最高の猪犬を作る」ということは、**今までなかった、猪猟を変えてしまうような、抜きん出た素晴らしい猟能の猪犬を作る**ということである。猟能は天性によるところが多く、猟犬であっても初めから具わっていたものではない。ここで言う「天性の猟能」とは、猪猟の達人の苦労や努力によって何世代にも亘って作られ、育て上げられた根っからの猪犬に秘められた技のことである。

そしてそれは、猟場でのイノシシとの攻防の中で、信頼している主人にだけ見せてくれる、まさに「取っておきの技」「極めつけの芸」である。愛犬のこの芸を交配に生かすことによって、目指す「最高の猪犬」に近づくのである。

猪犬である以上、いかなる悪条件においても、命懸けで主人に尽くす。主人が撃ち獲るまでは、傷つきながらも全力で大猪にくらいつく。主人は、その愛犬の姿に打たれ、心底「愛しい」と思う。私は、そのような猪犬を作り、残したいと思っている。（つづく）



長野県遠征にて。ベテラン揃いである

*ご意見のある方は、ご連絡ください。

TEL 044-944-3220